慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	家族の元へ戻る鬼の話：『広異記』「薛万石」と「李覇」を中心に
Sub Title	The tales of the ghost who returned its beloved home : focusing on Guangyiji (広異記) Bi Wanshi (薛万石) and Li Ba (李覇)
Author	溝部, 良恵(Mizobe, Yoshie)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2019
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Hiyoshi review of Chinese studies). No.12 (2019.) ,p.1- 24
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20190331-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

家族の元へ戻る鬼の話

――『広異記』「薛万石」と「李覇」を中心に

溝部良恵

はじめに

中国において、六朝以来清代に至るまで、連綿と怪異を記してきた志怪は、宋代以前は、正史の経籍志や芸文志において、史書として扱われてきた一方で、鬼神、神仙の話などフィクションに発展する要素も備えていたため、現代の中国小説史においては「中国小説の祖」と位置づけられる、他に類を見ない特色を持つ書物である。しかしその複雑な性質のため、現在でも志怪書を歴史書あるいはフィクションとして扱う両方の立場が混在している。こうしたなか、筆者は、これまで、唐代初期の牛肅『紀聞』、戴孚『広異記』などの小説集に着目してきた。[1]

筆者は、以前『紀聞』「淮南猟者」と『広異記』「安南猟者」というあらすじを同じくする象の報恩譚を比較し、『広異記』においては、象という話すことのできない動物の動作を描くことのみで、象が自分達を悩ます獣の存在

を伝え、猟師に獣退治を手伝ってもらったことを指摘した。つまり『広異記』において、作者の戴孚は、話全体の構成を考え、書くことと書かないことを調節しており、その書き方は現代の小説の手法にもつながるものと考えた。そして『広異記』は、従来一般的に「志怪から伝奇への過渡的作品」と評価されてきたが、筆者は、「安南猟者」をはじめとする幾話かに、フィクションの萌芽があり、中には、中唐期の「任氏伝」や「鶯鶯伝」などと比べても遜色のない話もあり、唐代小説史上重要な位置を占める小説集であると考えてきた。しかし一方で実際には『広異記』全体を見ると、量的には、志怪風の話が多いのも事実であり、そのことを考慮にいれず、フィクション風の話のみに注目すれば、この小説集の性質を解明することから遠ざかってしまうことになるとも考えてきた。

『広異記』は、中唐期の戴孚によって編まれた書である。戴孚と同年（至徳二年、七五七）の科挙の合格者であり、中唐を代表する詩人の一人である顧況による「戴氏広異記序」（『文苑英華』巻七三七所収。以下「序」と記す）が残されており、この「序」が戴孚に関するほぼ唯一の資料となっている。「序」によれば、『広異記』は、「二十巻、用紙一千幅、蓋十万余言」であったというが、原書はすでに失われており、『太平広記』を中心に三百条あまりの逸文が残されている。そのうち全体の三分の一の五十話余りは、鬼に関する話である。そのほか狐（約三十話）、虎（約二十話）、蛇（約十話）など動物の話が多く、神仙に関する話も十五話ほど残されている。またその他の動物や胡人譚、神魂に関する話などその内容は多岐にわたる。従来の『広異記』に対する一般的な評価は、六朝志怪を受け継ぎながら、一部中唐以降に多く書かれた「鶯鶯伝」や「李娃伝」のような所謂伝奇につながるような物語性の高い部分もある書として、「志怪から伝奇への過渡的作品」というものである。例えば李剣国氏は、「六朝志怪を継承し、概ね聞き書きの方法を用いている。そのため話は短いものが多いが、情緒を重んじ、文才を発揮しており、すでに唐代の人の作品のような趣きがある。比較的長い話は、四、五十篇ほどあり、文章に工夫がこら

され、伝奇の方法が用いられており、とくに進歩の跡をみることができる」と『広異記』を評価している。[2]

一方グレン・ダッドブリッジ氏は、「基本的には、『広異記』は、記録の文献であり、ファンタジーや創作物ではない」として『広異記』を文学としてではなく、歴史的資料、ただし正史に代表されるような官製の歴史ではなく、不正確なところもあるかもしれないが、個人の歴史的記録つまり当時の人々の見聞の記録として扱うことを提唱し、そうした立場から『広異記』を読むことを試みている。[3]

欧陽健氏[4]は、ダッドブリッジ氏の考えを踏まえながら、『広異記』を含む志怪小説（欧陽健自身の言葉によれば、神怪小説）に対する評価として、二つの態度があることを指摘している。一つは、その資料的価値を重視する姿勢である。つまり内容が怪異に関することで、歴史的な事実と認め得るものではなくても、その時代の人々の考え方を反映するものとする立場である。もう一つは、神怪小説も歴史小説や世情小説のように人々の現実の生活を反映したものであり、文学と考えることができる、とするものである。

以上のように『広異記』に関して、フィクションとしてあるいは歴史的資料（見聞の記録）として扱う二つの立場がある。しかしダッドブリッジ氏も正史とは異なる唐代の人々の生き生きとした姿が描かれていることを評価しており、そもそも見聞を記したものかフィクションか、戴孚あるいは戴孚と同時代の人々の中に、そのような意識があったとは考えにくい。むしろ両者を選別するよりも、各小説集の中に見られる見聞を記した話とフィクション風の話には、どのようなつながりあるいは違いがあるのか、そしてそれを踏まえて、『紀聞』や『広異記』といった小説集の性格を考えていくことが重要なのではないだろうか。そこで本稿においては、『広異記』の中で多くの数を占める鬼の話、特に家族のもとに戻ってくる鬼の話の中の「薛万石」（『太平広記』巻三三七：以下『太平広記』所収の話は、括弧内、巻数のみ記す）と「李覇」（巻三三一）という話に注目して、以上のような問題につい

て考えてみたい。

一．家族の元に戻る鬼（一）――「薛万石」の背景、袁晁の乱

先に触れたように『広異記』の話として、『太平広記』の「鬼」類に分類されている話は、五十条あまりある。また再生など他の分類に入っている鬼に関係する話も少なからずあり、多くの話が鬼、つまり人の死に関係ある話であると言える。その中で、今回注目してみたいのは、鬼がなんらかの理由で、家族のもとに戻ってくるという話である。家族のもとに戻る話と言えば、亡くなった人が生き返る再生譚もあるが、本稿で特に注目したいのは、「鬼が家族の元に戻ってきて、目的を果たすと、再び姿を消す」という種類の話である。鬼は決して生き返るわけではなく、目的を達すると去っていく。そのような話は、『広異記』の中には、およそ三十話ほどある。

例えば、娘を遺して亡くなった父親が再び娘の前に姿を現し、絹や餅を置いていく話（「朱自勤」巻三三八）、あるいは、もしどちらかが先に亡くなったら、死後のことを伝え合おうと約束していた妹のもとへ亡くなった姉がやってくる話（「韋璜」巻三三七）、二十年前に亡くなった父親を息子が市場で見かける話（「楊元英」巻三三〇）など様々な話がある。当時の人々にとって死後の世界への興味と家族が死後どのようになっているのかを心配する気持ちがある中で、亡くなった人が再び家族のもとを訪れたという話は、人々の間に伝わり、記すべき事柄として、書き留められたのだろう。『太平広記』の鬼類にも時代を問わず、こうした話は収められている。

その中で、『広異記』の中には、注目すべき話として、「家の主を亡くし、途方に暮れる家族のもとに亡くなった本人が訪れ、死後に起こる問題を取り仕切り、落ち着いたところで、再び姿を消す」という話がある。中でも「薛

万石」と「李覇」の話は、あらすじをほぼ同じくする話であるが、「薛万石」は、袁晁の乱という宝応元年（七六二）に、台州（現浙江省）の豪農、袁晁が起こした農民反乱の際に起こった際の話を聞き取って記したものである。一方「李覇」は、李覇の死を嘆く妻の前に現れた李覇が、死後にふりかかる難題を解決するさまが、ユーモラスなエピソードを通して綴られる話で、戴孚がかなり書き方に工夫を凝らしたと感じられる『広異記』の中でも佳篇と言える話である。以下二話の描き方の比較を行ってみたい。

まず「薛万石」の話を見てみたい。

薛万石は、河東の人である。広徳年間（七六三―七六四）の初め、浙東観察使薛兼訓に用いられ、永嘉の令となった。数か月したとき、ふいに妻に向かって、「あと十日もすれば、我が家の食料は、尽きてしまうだろう。そしてその時、私の命も尽きるのだ。米は不作で、値上がりしておる。どうしたらよいのだろう。」と言うので、妻は、「あなたは、健康でいらっしゃるのに、どうしてそんな不吉なことをおっしゃるのです」と応じた。万石は、「死とは憎むべきものであるが、告げられれば、避けることはできないのだ。どうしようもないのだ」と言い、果たして、その時が来ると、突然死んでしまったのだった。仮葬が終ると、棺の中から、ふいに万石が録事や佐史を呼ぶ声が聞こえてきた。呼ばれた者が行ってみると、万石は次のような事を言った。「私は、不幸にも死んでしまった。とてもつらいことだ。これまで君たちを煩わせたせたことはなかったが、今は妻子の生活は窮しており、故郷へ帰ることもできない。そこで他ならぬ君たちを呼んで、家族の面倒を見てもらいたいと思ったのだ。」その頃、永嘉では、米が高騰しており、一斗あたり一万銭にもなっていた。万石は部下達にそれぞれ量を決めて、米を差し出すように求めた。部下達は、恐れをなして、丞や尉に至るまで、皆、

米を贈ったのだった。数日後、万石は家族に、「私はしばらく越州に行って、薛どのにお会いしてくる。お前達には、食料を用意したから、私も安心じゃ」と告げると、これから十日ほど、万石の声は聞こえなかった。万石の妻が悲しみ泣き疲れぐったりとして、昼寝をしていると、ふいに万石の声が聞こえてきた。妻は驚いて起き上がり、「あなたはどこからいらっしゃったのですか」と言うと、万石は、「私は、越州から帰ったところだ。薛どのは、わしが死んだことをもうご存じで、張卿を迎えによこしてくださった上に、二人の娘のために、それぞれ婿を選んでくださった。薛どのとは兄弟の契り交わした仲だが、本当に情誼に厚いお方だ。お前たちは、速やかに支度を整えて、張卿がいらしたら、すぐに出発しなさい。さもなくば、山賊に襲われるであろうから、すぐにここを離れるのだ」と言った。これを聞いて家族は、支度を整え、張卿が到着すると、その日のうちに出発した。永嘉から二百里ばかり行ったところで、温州が陥落した。家族は道中が危険な時には、香をたいて、万石に尋ねた。すると、必ず返事があった。尋ねなければ、答えることはなかった。私（戴孚）は、この話を万石の親戚の人が話しているのを見たのである。[5]

薛万石、河東人。広徳初、浙東観察薛兼訓用万石為永嘉令。数月、忽謂其妻曰、後十日家内食尽、食尽時我亦当死、米殻荒貴、為之奈何。婦曰、君身康強、何為自作不祥之語。万石云、死甚可悪、有言者、不得已耳。至期、果暴卒。殮畢、棺中忽令呼録事、佐史等。既至、謂曰、万石不幸身死、言之悽愴。然自此未嘗擾君、今妻子飢窮、遠帰無路、所相召者、欲以親愛累君爾。時永嘉米貴、斗至万銭、万石於録事已下求米有差。吏人凶懼、罔不依送、迨至丞、尉亦有贈。後数日、謂家人曰、我暫往越州謁見薛公、汝輩既有糧食、吾不憂矣。自爾十余日無言。婦悲泣疲頓、昼寝、忽聞其語、驚起曰、君何所来。答云、吾従越還、中丞已知吾亡、見令張卿来迎、

又為見両女択得好婿。兄弟之情、可為厚矣。宜速装束、張卿到来、即可便発。不爾、当罹山賊之難、第宜速去也。家人因是装束、会張卿至、即日首途。去永嘉二百里、温州為賊所破。家人在道危急、即焚香諮白、必有所言、不問即否。親見家人白之。

永嘉を含む浙東地方は、玄宗期から、慢性的な財政赤字を解消するため、厳しく税が取り立てられた地域であった。安史の乱（七五四―七六三）勃発後は、軍事費をまかなうため、さらに徴税が徹底された。このため没落し、流民となる農民も多数いた。袁晁は、これらの不満を持つ農民をまとめ、宝応元年（七六二）八月、浙東台州で反乱を起こし、年号を宝勝と称し、この地方一帯を劫掠した。率いた兵は最大で二十万、九月には信州、十月には、温州、明州を陥落するなど十六の郡邑を支配下においた。袁晁は、唐王朝を模倣し、公卿数十名を任命し、独立国家を樹立しようとしたが、翌年の三月には、朝廷から派遣された李弼光によって袁晁の軍は破れ、広徳二年の十一月には、袁晁は捕らえられ、誅殺された。二年ほどの反乱であったが、松本秀一氏によれば、唐末、黄巣の乱に匹敵するほどの規模を持った大きな反乱であったという。[6] まだ安史の乱が完全に収束していない中で起こったこの動乱は、唐王朝に大きな打撃を与え、さらに乱の影響は、浙江地方の広範囲にわたり、これ以後、唐末に至るまで、この地方では、農民による反乱が繰り返されることとなる。

「薛万石」の冒頭に「広徳初、浙東観察薛兼訓用万石為永嘉令」とあるが、広徳とは、袁晁の乱の起こった宝応元年の翌年の七月に改元された年号である。しかしこの頃は、天宝十五年（七五六）に、安史の乱が起こり、至徳（七五六―七五八）に改元された後、乾元（七五八―七六〇）、上元（七六〇―七六一）、宝応（七六一―七六三）、広徳（七六三―七六四）と目まぐるしく改元されており、史書においても、記述に混乱が見られる。[7]「薛万石」に

は、薛万石が、家族に「当惟山賊之難、第宜速去也」と言い、さらに「去永嘉二百里、温州為賊所破」と書かれていることから、正確には、薛万石が、永嘉の令に任じられたのは、宝応元年、袁晁の乱の起こる直前だったのではないかと考えられる。また話の最後には、この話が薛万石の親戚によって語られたことが記されており、一家の主人を亡くした薛万石の家族に起こった不思議な出来事として、親しい人々の間で話されていた話を書き留めたものと考えられる[8]。

二．家族の元に戻る鬼（二）――「李覇」

一方「李覇」には、冒頭に、いつのことかについては言及がなく、「岐陽の県令の李覇という人は、厳格で気性が荒く、人情味のない人であった。丞、尉から、典吏に至るまで皆李覇にひどい目にあわされたが、李覇自身は、清廉潔白、剛直な人柄で、妻子は苦しい暮らしをしていた（岐陽令李覇者、厳酷剛鷙、所遇無恩、自丞尉已下、典吏皆被其毒。然性清婞自喜、妻子不免飢寒）」と李覇が率直で清廉な人柄であるために、不器用な生き方しかできず、同僚ともうまくいかず、妻子も苦しい生活を強いられていたことが書かれている。続いて、李覇の死後のことを以下のように記す。

棺に収めてしまうと、家には弔問客が一人も来なくなってしまった。覇の妻は毎日お棺を撫で、大声で泣きながら、「あなたの在世中の勢いはどうなさったのですか。妻子にこのような寂しい思いをさせるとは」と叫んでいた。数日後、棺の中から突然、覇の声が聞こえてきた。「妻よ、そんなに嘆くでない。これから帰って始

末をつけるからな。」その日の晩の登庁時間になると、覇は家の者に大広間に机を置くようにと命じた。すると覇が姿を現し、役人たちを呼び集めるように命じた。役人達は、普段から覇を恐れていたので、命令を聞くと、一目散に駆け付け、李覇の姿を見るや、恐ろしさに震え上がったのだった。覇はさらに丞および主簿、尉を呼びつけた。彼らがやって来ると、覇は怒鳴りつけて言った。「君らはなんて薄情なんだ。私が君たちを殺せないとでも思っているのか。」覇が言い終わると、三人ともばったり倒れて息が絶えた。三人の家族がやってきて、庭先に座って命乞いをすると、覇は、「物事の道理というものを理解すれば、生き返らないなどと心配するには及ばない」といい、一人あたり絹を五束出すことで許すこととした。絹が届けられると、皆すぐに生き返った。皆が覇に謝って帰っていった後、覇は二人の衙典に向かって言った。「私は平素からお前達によくしてきたつもりだ。それなのになぜ他の者達と同じような薄情な態度をとったのだ。だがお前達を殺しても百頭が一時に倒れ、今にも死にそうになった。そこで一人が、二頭ずつ駿馬を贈ることを申し出ると、馬は元また何の得にもならん。お前たち二人の家の馬を殺して私の力を見せてやろう。」するとまもなく両家の馬数通りにもどった。覇はそれから、他の役人達に向かって、「私は昔から清廉を旨としてきたが、今はもう死んでしまったのだから、君達わずかでいいから恵んではくれないだろうか」といった。そこで役人達は、各々絹五疋を出すことにした。これが終わると、今度は車を提供する者、馬を提供する者、覇の棺について世話をする者を指名して、命令に背いたものはかならず死ぬと言い渡した。こうして一更の頃ようやく解散した。

既歛、庭絶弔客。其妻毎撫棺慟哭、呼曰、李霸在生云何、令妻子受此寂寞。数日後、棺中忽語曰、夫人無苦、当自辦帰。其日晩衙、令家人於庁事設案几、霸乃見形、令伝呼召諸吏等。吏人素所畏懼、聞命奔走、見霸、莫

不戦懼股慄。又使召丞及簿尉、既至、霸訶怒云、君等無情、何至於此。為我不能殺君等耶。言訖、悉顛仆無気。家人皆来拝庭中祈禱。霸云、但通物数、無憂不活。卒以五束絹為准、絹至便生。各謝訖去後、謂両衙典、吾素厚於汝、何故亦同衆人。唯殺汝一身、亦復何益。当令両家馬死為験。須臾、数百疋一時皆倒欲死。遂人通両疋細馬、馬復如故。因謂諸吏曰、我雖素清、今已死、謝諸君、可能不恵涓滴乎。又率以五疋絹畢。指令某官出車、某出騎、某吏等修、違者必死。一更後方散。

「薛万石」では、万石が家族のために同僚に米を要求するとかつての部下たちは恐れ、すぐに言われた通りに米を差し出したことが、記されているが「李覇」では、部下とのやりとりが詳細に描かれている。李覇の死後、急に冷淡になった同僚達が、李覇の再来に慌てふためき、恐れ、李覇の言うとおりにする滑稽な様が描かれることを通して、同僚達の薄情さ、遺された家族の置かれた気の毒な状況が浮き彫りになる。この後、李覇の家族は、李覇の遺体を連れて、故郷へと帰る。

二日後、全ての手配が整うと家族は出発した。祭祀を行うべき場所に着くごとに、供物を捧げ、覇が食べ終わると、また馬に乗って出発した。およそ十里ほど行き、郊外に出ると覇の姿はついに見えなくなった。夜になると、車馬を停め、妻子は決まりどおりに泣こうとした。すると棺の中から声がして、「私はここにおる。お前たちは疲れているのだから、泣く必要はない」と言った。覇の家は都にあったので、岐陽からは千里あまりも離れていたが、宿屋に着くごとに、覇は家族に泣くなと言いつけるのであった。こうして出発してから数百里ほど進んだ頃、ふいに覇が息子に言った。「今夜は寝てはならん。好い馬を盗みに来る者がいるから、用心

しておくように。」しかし家族は長旅に疲れていたので、約束を守ることができず、その夜、果たして馬がいなくなってしまった。次の日に覇にそのことを報告すると、覇は「泥棒に注意するようにいったのに、なぜ眠りこんでしまったのだ。だが馬は結局は失わないで済むだろう。恐らくこの旅館の東側のあたりに、南に向かう道がある。その道に沿って十里余りも行けば林があって、馬はそこにつないであるだろう。」覇の言うとおりに行ってみたところ、果たして馬を取り戻すことができた。都に着くと、親族がこのことを聞きつけて、争って弔問にやって来た。朝から晩まで覇は挨拶にくる客の相手をしたので、尊敬の念を起こさぬものはいなかった。人々が騒がしくおしかけて来るので、家族がそのわずらわしさに耐えかねていたところ、覇が息子に向かって、このように言い始めた。「客人達が押しかけてくるのは、私を見たいだけなのだ。息子よ、広間に席を設けてくれ。親戚達に一度姿を見せるのもよかろう。」息子は李覇の言うとおりにした。皆が庭で待っていると、しばらくして李覇が「やってきたぞ」と言った。幕を巻き上げさせると、覇の姿が現れたが、頭は甕ほどの大きさがあり、目は赤くとび出して、客達をにらみつけている。皆が驚いて腰を抜かしてしまうと、頭は少しずつ小さくなっていった。覇は息子に、「生きている人間と死んだものの霊魂は、住むところが異なるのだ。この屋敷は私が長くいるべきところではない。速やかに郊外に埋めるように」と言い終わると、その姿は見えなくなった。それからは声も聞こえなくなった。

後日、処分悉了、家人便引道、毎至祭所、留下歆饗、饗畢、又上馬去。凡十余里、已及郊外、遂不見。至夜、停車騎、妻子欲哭、棺中語云、吾在此、汝等困弊、無用哭也。霸家在都、去岐陽千余里。毎至宿処、皆不令哭。行数百里、忽謂子曰、今夜可無寐、有人欲盗好馬、宜預為防也。家人遠渉困弊、不依約束、爾夕竟失馬。及明

啓白。霸云、吾令防盗、何故貪寐。雖然、馬終不失也。近店東有路向南、可遵此行十余里、有棗林、馬繫在林下。往取。如言得之。及至都、親族聞其異、競来弔慰。朝夕謁請、霸棺中皆酬対、莫不躇蹶。観聴聚喧、家人不堪其煩。霸忽謂子云、客等往来、不過欲見我耳。汝可設庁事、我欲一見諸親。其子如言、衆人於庭伺候。久之曰、我来矣。命捲幃、忽見霸、頭大如甕、眼赤睛突、瞪視諸客等。客莫不顚仆、稍稍引去。霸謂子曰、人神道殊、屋中非我久居之所、速殯野外。言訖不見、其語遂絶。

毎夜、妻子が儀礼通りに泣こうとすると、棺の中から声がして、自分はここにいるのだから、泣く必要はないと言ったり、馬が盗まれることを家族に教え、家族を災難から守ろうとしたことなどが記される。そして最後には、故郷に戻った際に、噂を聞いて押し掛ける親戚たちの相手を律儀にしていたが、だんだんと煩わしくなり、親戚たちを集め、異様な姿を見せ、親戚たちが腰を抜かすほど驚かす、といった複数のエピソードが書かれる。

これらのエピソードは、儀礼にとらわれることの無意味さ、このような境遇の家族が往々に出会ったであろう危険、理不尽、興味本位に集まる親戚達の姿など、いずれも現実に一人の人間の死の際に引き起こされるであろう様々な問題を踏まえたものである。しかし同僚達を懲らしめている場面でさえ、決して陰湿に書かれることはなく、また一つ一つのエピソードも無駄なく的確に配置されているため、上記のような深刻な問題を浮かび上がらせる一方で、全体はユーモラスな雰囲気に包まれている。「薛万石」と比較すれば、「李霸」が一つ一つの表現や全体の構成に気を配り書かれていることがわかるだろう。

三　聞き書きから創作へ

この「薛万石」と「李覇」の話だけではなく、聞き書きのような話から、書き換えたのではないかと考えられる話は、『広異記』の中にほかにも多くある。例えば一例をあげるなら、普通の家族の日常に潜む悲しみを描き出した話に「安宜坊書生」（巻三三一）がある。あらすじは、「ある夜、洛陽の安宜坊の書生のところに鬼がやってきて、書生を連れ出し、ある家の子供を冥土に連れて行く手伝いをさせる」という話である。直感で子供の危機を感じ取りおびえる母親と、それにかまわず子供を連れ去ろうとする鬼の姿を通し、洛陽の街の片隅で、ひっそりと進む子供の死が以下のように、描かれている。

定鼎門に着くと、鬼は書生を背負って門の隙間から出て、先に進んだ。五の橋のところまで来ると、道の傍らに一軒の家があり、天窓から灯りがもれている。鬼は、また書生を背負い、天窓のところまで上った。そこから見下ろすと、一人の婦人が、病気の子供を前に泣いており、夫はその傍らで、うたた寝をしている。すると鬼は、天窓を通り抜けて下りていき、手で灯りを覆った。婦人は恐ろしそうに、声を荒げて夫に言った。「坊やは今にも死にそうなのに、どうして寝ていられるの。今、何か悪いものが来て灯りを消したのよ。起きて灯りをつけてちょうだい。」夫が起きて灯りをつけると、鬼は婦人をかわし、ふいに布袋を取り出し、子供を入れた。子供は袋の中でなおも動いているようだったが、鬼はそのまま袋を背負って、天窓まで上ってくると、さらに書生も背負って地に降りた。また定鼎門を抜け、書生の家までたどり着くと、鬼は礼を述べた。「私は、

冥途の役所の命令で、子供を連れに来ました。子供を連れて行くには、生きている人間を伴っていかなければいけないのです。それであなたを煩わせたのです。お許しください。」

俄至定鼎門内、鬼負書生従門隙中出、前至五橋、道傍一家、天窓中有火光。鬼復負書生上天窓側、俯見一婦人対病小児啼哭、其夫在傍仮寐。鬼遂透下、以手掩灯、婦人懼、呵其夫云、児今垂死、何忍貪臥。適有悪物、掩火、可強起明灯。夫起添燭、鬼迴避婦人、忽取布袋盛児、児猶能動於布袋中、鬼遂負出。至天窓上、兼負書生下地、送入定鼎門。至書生宅、謝曰、吾奉地下処分、取小児、事須生人作伴、所以有此煩君、当可恕之。

この話には「裴盛」（巻三三一）という類話がある。「安宜坊書生」では、子供を連れて行くためには、生きている人間を連れて行かなければならないと鬼が説明しており、書生の役割が、鬼が子供を連れ去るのを眺めていることであるのに対し、「裴盛」では、「裴盛」が鬼に命令されて、実際に子供を袋に入れて抱えて出て行くという役割を担わされている。「裴盛」の話を見てみたい。

董士元が以下のように語った。義興県の尉である裴盛が昼寝をしていると、突然鬼にひっぱられて、身体と魂ともに連れて行かれた。鬼は、「子供を一人、いただきたいのだ」と言った。子供の家に着いてみると、両親は、子供をはさんで横たわっていた。寝床の前には仏像が置かれていた。（以下脱文）鬼が手を一振りすると、父親も母親も眠ってしまった。鬼は裴盛に子供を抱きかかえさせ、寝床から出させた。子供を抱くと声を出したので、両親は驚いて起きたが、鬼は裴盛を引っ張って、外へ出た。裴盛が何度も自分を元通りに戻してくれ

と言うと、鬼は裴盛を押して、体の中に魂を入れた。それでやっと裴盛は目が覚めたのである。

董士元云、義興尉裴盛昼寝、忽為鬼引、形神随去、云奉一児。至児家、父母夾児臥、前有仏事、鬼云、以其仏[9]（以下三文字脱文）生人。既至、鬼手一揮、父母皆寐。鬼令盛抱児出牀、抱児喉有声、父母驚起、鬼乃引盛出。盛苦邀其至舎、推入形中、乃悟。

「裴盛」は「董士元が云う」という書き出しで始まっており、戴孚が人から聞いた話を書き取ったものであることがわかる。

この二話を比べてみても、戴孚が新しい話を創り出す過程を想像することができるのではないだろうか。「裴盛」の話を聞いた時、人間が鬼の手伝いをさせられるということの珍しさにも増して戴孚の心をとらえたのは、一つの場面だったのではないだろうか。それは一人の子供の死をめぐって、都会の片隅の一部屋が生と死が交錯する空間となり、両親が怯える中、鬼が無情にも子供を奪い去っていくという場面である。そしてそれを描くためには、外側から全て見渡すことのできる視点が必要であった。こうして「安宜坊書生」では、書生に「見る」という役割が与えられることになり、そのことによって、この篇はごく短い話であるが、緊迫感に満ちた一つの場面を鮮やかに切り取り、瀕死の子供につきそう母親の焦りや、そのそばでついうたた寝をしてしまう夫といった唐代の人々の生身の姿を描き出すことができたのではないだろうか。

この他にも、『広異記』には、三十話以上の狐の話があるが、その中に、やはり戴孚が、書き換えをしたのではないかと考えられる話がある。それは、「①ある日突然主人に目通りを願う男性の客がやってくる。②その客が突

然主人の娘と婚姻関係を結びたいと言い出す。③主人が驚き拒否すると、狐に姿を変え、怪異を起こし、その家に居座る。④道士の力を借りるなどして、狐を退治する」という展開を持つ「おしかけ狐」とも呼べるような話で、同じような展開を持つ話として、「楊成伯」（巻四四八）、「汧陽令」（巻四四九）、「韋明府」（巻四四九）、「唐参軍」（巻四五〇）の四話がある。その中で、「唐参軍」は、「洛陽の唐参軍のもとにある日、趙門福と康三と名乗る二人の男が交際を求めやってくるが、怪しんだ唐参軍によって、康三は殺されてしまう。趙門福自らが千歳の狐であることを告げ、復讐を誓い去って行き、唐参軍はその言葉に怯え、僧侶を呼び、経を唱えてもらう。一心に経を唱えていると、五色の雲に包まれた仏がやってきて、肉を食べるように勧め、僧侶、唐参軍一同その言葉に従っていると、仏は趙門福の姿となり、だまされた皆を笑い去って行く」という話である。他の三話が娘と結婚しようとする異類通婚譚の要素を持ち、最後は、道士や僧侶と闘い、敗れ、人間のもとを去っていくのに対し、「唐参軍」では、ただ交際を求めた際には、怪しい狐であれば、拒否した人間たちが、仏であれば、受け入れ、しかも僧侶の言葉であれば、仏教の戒律を破り、肉食することさえ、鵜呑みにする様が描かれている。

僧達は一心不乱に経を唱え、効験を示して自分の手柄にしたいと考えていた。後のある日、夕立の後、僧達が軒先に座っていると、突然五色の雲が西からやって来て、唐氏の家の前で止まった。中には荘厳な容貌の仏が座っていて、「お前達は唐家のために野狐を追い払っているのか」という。僧達は頭を地に触れんばかりにして拝礼し、唐家のものもみな丁寧に拝礼して、本当の仏を見られるのを喜び、降臨して欲しいと願った。しばらくすると仏は降りて来て、戒壇の上に座った。一家のものは篤くもてなした。仏は僧達に「その方どもは仏道を修めようとしておるのだろうが、どうして精進を続けているのだ。仏事を行っていても肉を食べられるの

ではないか。道心を堅固に保ち得るかが問題で、肉を食べても修業の妨げにはならぬのだ」と言う。そこで唐家の者に肉を買って来させ、仏が自分で料理をしてから、僧や家族に与え食べさせた。皆が食べ終わり、ふと壇上を見上げると、そこにいたのはなんと趙門福である。一家全員だまされたことを悔しがっていると、門福は笑って「わしを追い払おうなどという無駄なことはしない方がいい。わしはもう来ないぞ」と言い、それきり現れなかった。

其僧持誦甚切、冀其有効、以為己功。後一日、晩霽之後、僧坐楹前、忽見五色雲自西来、径至唐氏堂前。中有一仏、容色端厳、謂僧曰、汝為唐氏却野狐耶。僧稽首。唐氏長幼虔礼甚至、喜見真仏、拝請降止。久之方下、坐其壇上、奉事甚勤。仏謂僧曰、汝是修道、請通達、亦何須久蔬食。而為法能食肉乎。但問心能堅持否、肉雖食之、可復無累。乃令唐氏市肉。仏自設食、次以授僧及家人、悉食。食畢、忽見壇上是趙門福、挙家歎恨、為其所誤。門福笑曰、無労厭我、我不来矣。自爾不至也。

「汧陽令」の冒頭においても、狐は仏に化け、人間に取り憑こうとし、道士に退治されるが、『広異記』には、他にも四話、狐が仏に化ける話がある。例えば「代州民」（巻四五〇）は、「ある家に菩薩がやって来るが、娘と通じ、妊娠させてしまう。留守をしていた兄が帰宅後、怪しく思い、道士に相談すると、道士は道術を使う。菩薩は老いた狐となって逃げて行った」というあらすじの話である。「長孫甲」（巻四五一）は、「仏教を篤く信奉する家族のもとに、文殊菩薩がやってくるが、それを怪しんだ息子が道士に依頼し、退治すると、十日後、また仏がやってくる。今度は道士を呼んでも効き目がない。すると仏は、自分は三万歳の狐剛子であり、先に殺されたのは、自分の

子孫だといい、道士を杖で打ちすえ、家族からもらった報酬を返すように言う」という話である。いずれの場合も「忽見菩薩乗雲而至」（「代州民」）、「挙家見文殊菩薩、乗五色雲従日辺下」（「長孫甲」）と仏に化けた狐は雲に乗って人々のもとにやってくる。

「唐参軍」でも、「忽見五色雲自西来、径至唐氏堂前。中有一仏、容色端厳」とあり、以上のような話を踏まえていることは明らかである。しかし戴孚は、仏に化けた狐を人間が退治するという単純な展開にすることはなく、趙門福に確信犯的に仏のようにふるまわせ、そのことによって、もっともらしく念仏を唱えながら、心の中では良からぬことを考えている僧侶の姿や仏の言葉を素直に信じてしまう唐参軍の家族など、狐に振り回される人間の姿を浮かびあがらせている。

戴孚は、多くの狐の話を聞き、集めながら、その興味の方向は、狐だけでなく、狐に応対する人間にも向けられるようになったのではないだろうか。そしてそこに見えてきた人間は、狐と接しながら、最後には何の疑問もなく、狐を退治し、排除しようとする冷酷さを持ち合わせている一方で、「唐参軍」の僧侶の態度に見られるように、手柄を立てることを考え、にせの仏の言葉に安々と従ってしまうような人々であった。

そこで戴孚は、こうした人間の姿を描き出すために、先に指摘した異類通婚の要素をなくすことで、人間と狐が対等に向き合う設定を作り出すとともに、道士や僧侶が狐と直接闘わないようにすることにより、狐退治に焦点が集まらないようにした。そして狐が化けるという性質を巧みに利用し、狐を仏に化けさせることによって、見ず知らずの者であれば、交際を拒もうとした唐参軍が、仏の到来は手放しで喜び、無批判にその言葉に従ってしまう姿や熱心に念仏を唱えるように見えて、心の中では手柄を立てることばかり考えている僧侶達など人間のあさましさをユーモラスに、しかし辛辣に描いたのではないだろうか。[10]

以上の通り、「李覇」以外にも『広異記』の中では、元になる話を改変したと思われる話が幾つかあり、その表現を追っていくと、戴孚は意識的にそうしたことを行い、新しい話を生み出していたのではないかと考えることができそうである。

ところで、川合康三氏は、「実事と虚構[11]」という論考において、詩における事実と作品の関係についての考察を行っている。白居易が江州司馬に左遷された際に、琵琶を弾く美女が、もとは長安の妓女で、今は都落ちして、商人の妻となっていることを知り、左遷された我が身と重ね合わせた「琵琶行」について、実はその元となるような「夜聞歌者」という詩があり、その二首の詩を比較してみると、「琵琶行」は、事実を装いながらも実際は、「夜聞歌者」を元に作られた虚構の詩ではないかと指摘している。そしてさらに以下のように述べる。

> 実事と虚構という問題設定のより大きな問題は、実事とは何か、虚構とは何かということだ。両者を二項対立として捉えること自体が問題を含んでいるのではないか。実事も捉え方によって、またさらに言語表現によって、様々な面を見せる。現実は創り上げられるものとさえいえる。虚構も結局は現実を元にした仮構である。両者は截然と分かれるものではなさそうだ。さらにそこに文学の働きが加わる。文学は我々の日常生活のなかにおける既成の見方とは異なる見方を提示する。それによって我々がふつうに捉えていた現実は揺らぎ、別の姿があらわれる。それが文学の働きではないか。言い換えれば、詩が現実を新たに露呈させる、それを知るのが文学を読むことであり、文学の役割であり、詩と現実の関わりの最も重要な部分であろう。

この川合氏の指摘は、まさに『広異記』の「薛万石」と「李覇」あるいは上に紹介した幾つかの話を比較するこ

とで見えてきたことと同じではないだろうか。例えば「李覇」には、袁晁の乱という歴史的背景は見られず、主を失った無力な妻子が途方に暮れる様子が中心に描かれている。「李覇」という話を通じて浮かび上がってくるのは、周りの人々の無理解、儀礼を重んじることの滑稽さである。これを浮かび上がらせる話の展開、文章は、まさに川合氏が指摘する「文学の働き」に通じるものではないだろうか。

以上を踏まえるならば、『広異記』の中の幾つかの話は、明らかにフィクションへの一歩を踏み出しているということができるのではないだろうか。

しかし筆者は、「李覇」のような話があるから、『広異記』は、評価すべき小説集である、と結論づけたいわけではない。川合氏が指摘するように、実事か虚構か二項対立として捉えること自体が問題を含んでいるのであれば、「薛万石」と「李覇」の話の関係をどのように考えればよいか、最後にこの問題について考えてみたい。

四．家族の元に戻る鬼（三）——再び「薛万石」と「李覇」

すでに指摘したように「薛万石」の話は、袁晁の乱を背景とした中で、薛万石の一家に起こった不思議な出来事を書き留めたものであった。先に触れたように、袁晁の乱が起こったのは、安史の乱が勃発した後に混乱が続いている時であり、多くの人が戦乱に巻き込まれ、自身や家族が命を奪われたり、一家が離散するなど不幸な出来事を経験したものと思われる。『広異記』の中には他にもそのような悲惨な経験が多く記録されている。例えば、「李叔霽」（巻三三五）は、安禄山の乱の際にあった痛ましい話を記したものである。内容は、「洛陽に住んでいた李叔霽の妻の叔母のもとに、李叔霽の妻が訪れ、夫と子供は殺されたので、やむなく再婚したという。ところが後に叔母

は後に李叔霽に会い、亡くなったのは、妻の方であったことを知らされ、叔母は妻が賊に辱められて死んだことを悟る」という話である。あるいは、「李瑩」（巻三三六）という話は、「李瑩の従妹は、安史の乱の際に亡くなったにもかかわらず、そのことを隠し、家に戻ると結婚もし、子供も産んで普通に暮らしていたが、亡くなったことを知っている兄が戻ってくることを察知して姿を消した」という内容を持つ。悲惨な状況の中で、平時には思いもよらぬような様々な出来事が起こり、それは人々によって語り継がれたのであろう。

「薛万石」の話は、「李覇」の話と比べればまとまりがないかもしれないが、しかし一方で、戦乱がせまりくるなか、薛万石が妻や娘を思い行う行動の数々を断片的に起こったままに記したような文章は、まとまりのない記述であるからこそ、むしろ当時の混乱を経験した人々の切迫した状況が感じられ、共感を得るものとなったのではないだろうか。我々が戦乱や災害が起こった際、全体が把握できずともわずかな情報でも求め、一喜一憂する気持ちと同じではないだろうか。

戴孚自身、開元年間の終わり頃に誕生したと考えられ、安史の乱が起こった直後の至徳二年に科挙に合格した。この年の科挙は、安史の乱の影響で、都で試験を実施することができず、複数の地で実施されるなど、戴孚自身の生涯にも少なからず影響があったものと思われる。「序」には、科挙に合格した後、校書郎として官職を始めた後の経歴は書かれておらず、最後は饒州（現江西省）の参軍で生涯を終えたと記されていることから、恐らく官吏としてはあまり恵まれぬ一生を送り、地方回りも多かったのではないかと思われる。そのような中で、親戚や友人、知り合いから多くの戦乱にまつわる痛ましい話や不思議な話を聞いたり、あるいは戴孚自身も様々な経験をしたことだろう。『広異記』の中で、唯一戴孚自身が登場する「王法智」（巻三〇五）では、大暦六年（七七一）桐盧県（現浙江省）で仲間たちと若い神がかりの女性を介し、昔の人物と交信したことが書かれている。戴孚が「薛万石」の

話を聞いた時期は特定できないが、この頃、戴孚は、温州のかなり近くにいたことになる。もしこの頃戴孚が、「薛万石」の話を聞く機会があったとすると、袁晁の乱の制圧後、まだ十年ほどしか時を経ていない。大暦五年までは、薛兼訓は、浙東観察使を務めていた。また「序」を書いた顧況に「仙遊記」(『全唐文』巻五二九)という文章がある。大暦六年、温州の李暦という人が、山奥深く迷い込み、そこで出会った人たちの暮らしを書いた文章であるが、その人たちが、李暦等に、どこからきたのか、袁晁の乱は収束したのか(問所従来、袁晁賊平未)、と問う句がある。以上のようなことからも袁晁の乱の記憶は、人々の間に色濃く残っていたものと思われる。「薛万石」の話も、戴孚にとっても記録した時には、まだ生々しい戦乱の様子を伝える話と感じられたかもしれない。いずれにしても戴孚は、袁晁の乱に翻弄された家族、薛万石以外の家族も含め、多くの名もなき人々が個々に直面した重く過酷な体験やその時に起こった不思議な出来事に触れ、それらを記録することを通じて、やがてそうした出来事の背景にあるより本質的な家族のつらさ、極限の状態にあって様々な行動をする人間の不可解さなどが見えてくるようになっていったのではないだろうか。しかし「薛万石」のような書き方では、出来事の背後にある普遍的で本質的な問題は浮かび上がってこない。「李覇」のように的確な文章配置が必要であった。つまり「薛万石」のような事実を伝える話があり、またそうした人々の苦しみに寄り添う中で、「李覇」のような話が生み出されたといえるのではないだろうか。そのような意味では、「薛万石」の話がなければ、「李覇」の話も書かれることはなかったと言い得るだろう。(12)

おわりに

唐代の伝奇の発生は、安史の乱以後に集中することから、乱を契機とした社会状況の変化と関係があると従来か

ら指摘されてきた。本稿を通じてみると『広異記』も同じように考えることができると思われる。そして『広異記』の中では、見聞の記録とフィクションは、はっきりと分けられるものではなく、むしろその両者が通じ合うことによって新たな物語が生み出されていったといえるのではないだろうか。今回はほとんどふれることができなかったが、『広異記』の中には、安史の乱に関する話も多くある。そうした話が、歴史的事実とどのような違い、あるいは関わりがあるのかも興味深い問題である。今後の課題としたい。

注

（1）「牛肅『紀聞』について――「呉保安」を中心に」（『中唐文学会報』第十一号、二〇〇四年所収）、「伝奇勃興以前の唐代小説における虚構について――「淮南猟者」（『紀聞』）と「安南猟者」（『広異記』）の比較分析を中心として――」（『日本中国学会報』第五二集、二〇〇〇年所収）。

（2）『唐五代志怪伝奇叙録』（南開大学出版社、一九九三年）。「本書上承六朝志怪，大都用記聞之法，故短幅者衆，然重乎情致，発揮藻思，已是唐人面目：而較長之篇達四五十事，装点筆墨，乃用伝奇之法，尤可見演進之跡也。」そのほか、程毅中『唐代小説史』（人民文学出版社、二〇〇三年、『唐代小説史話』文化芸術出版社、一九九〇年を改訂）、侯忠義『隋唐小説史話』（浙江古籍出版社、一九九七年）などでも同じような評価をされている。

（3）Glen Dudbridge, *Religious Experience and Lay Society in T'ang China: A Reading of Tai Fu's Kuang-i chi*, Cambridge university press, 1995.「1 A sequence of voices」に「The basic view that Kuang-i chi did indeed belong to a literature of record, not of fantasy or creative fiction」という記述がある。

（4）欧陽健「観天人之際，察変化之兆――従『広異記』看神怪小説的文学価値」（『寧徳師専学報（哲学社会科学版）』一九九九年第一期（総第四八期）所収）に「一条路線是強調神怪小説的史料価値，（中略）另一条路線則是強調神怪小説和歴史小説、世情小説一様都是人的社会現実生活的反映，因而都該算作〝人的文学〟，所不同的是神怪小説採用了非人或超人的離奇譎詭的形式而已。」とある。

（5）以下『広異記』のテキストに関しては、方詩銘輯『冥報記・広異記』（中華書局、古小説叢刊、一九九二年）を底本とし、適宜、張国風会校『太平広記会校』（北京燕山出版社、二〇一一年）を参考にした。

（6）袁晁の乱の歴史的背景、経緯については、松井秀一「八世紀中葉頃の江淮の叛乱――袁晁の叛乱を中心として――」（『北大史学』第二号、一九五四年所収）に詳しい。

（7）例えば『新唐書』「代宗紀」には、「広徳元年三月丁未、李光弼及袁鼐戦、敗之」との記述があるが、その直後七月の条に「壬子、大赦、改元」とあり、三月はまだ改元前である。『旧唐書』「代宗紀」においては、宝応二年三月の条に「丁未袁傪破袁晁之衆於浙東」として記述し、七月の条に「改元曰広徳」とある。

（8）この他にも、『広異記』には、袁晁の反乱を背景とした話として「慈心仙人」（巻三九）、「豆盧栄」（巻二八〇）がある。また小説や詩に記された袁晁の反乱については、胡正武「唐朝文学作品中的袁晁起義」（『台州学院学報』第二六巻第四期、二〇〇四年所収）に詳しい。また前掲ダッドブリッジ氏の書においても「6 Victims of the Yuan Chao rebellion」でこれら袁晁の乱について書かれた三話を乱についての歴史的資料として分析している。

（9）中華書局本では、「鬼云以其仏生人」の句について、『太平広記』明鈔本では、三文字欠字と指摘している。また『太平広記会校』においても、孫氏校本、陳氏校本いずれも欠字が示されており、脱文があるものと思われる。

（10）稲田孝『聊齋志異――玩世と怪異の覗きからくり』（講談社選書メチエ一五、講談社、一九九四年）において、稲田氏は中国文学に描かれている狐のイメージとして「狐は古代より、貧相な庶民から神様にいたるさまざまな風貌をしてわれわれの生活の中に出現した。ずるくて、いたずらで、敏捷でもあり、けものでもあれば神でもあり、みょうに卑しいかと思えば、端正な人格者でもある。明瞭なのは、彼らが人間と雑居しており、人間に親しそうな外貌を呈しながら、しかもてごわい對立者であったことだ」と指摘しているが、『広異記』の狐の話は、まさにこうしたイメージに重なるものであり、むしろこのイメージの形成に『広異記』の狐の話は大きな役割を果たしたのではないかと思われる。

（11）『名古屋大学中国語学文学論集』第二八輯、二〇一四年所収。

（12）戴孚にとって『広異記』がどのような意味を持つのかについては「顧況「戴氏広異記序」について」（『慶應義塾大学日吉紀要　中国研究』第五号、二〇一二年所収）においても考察した。